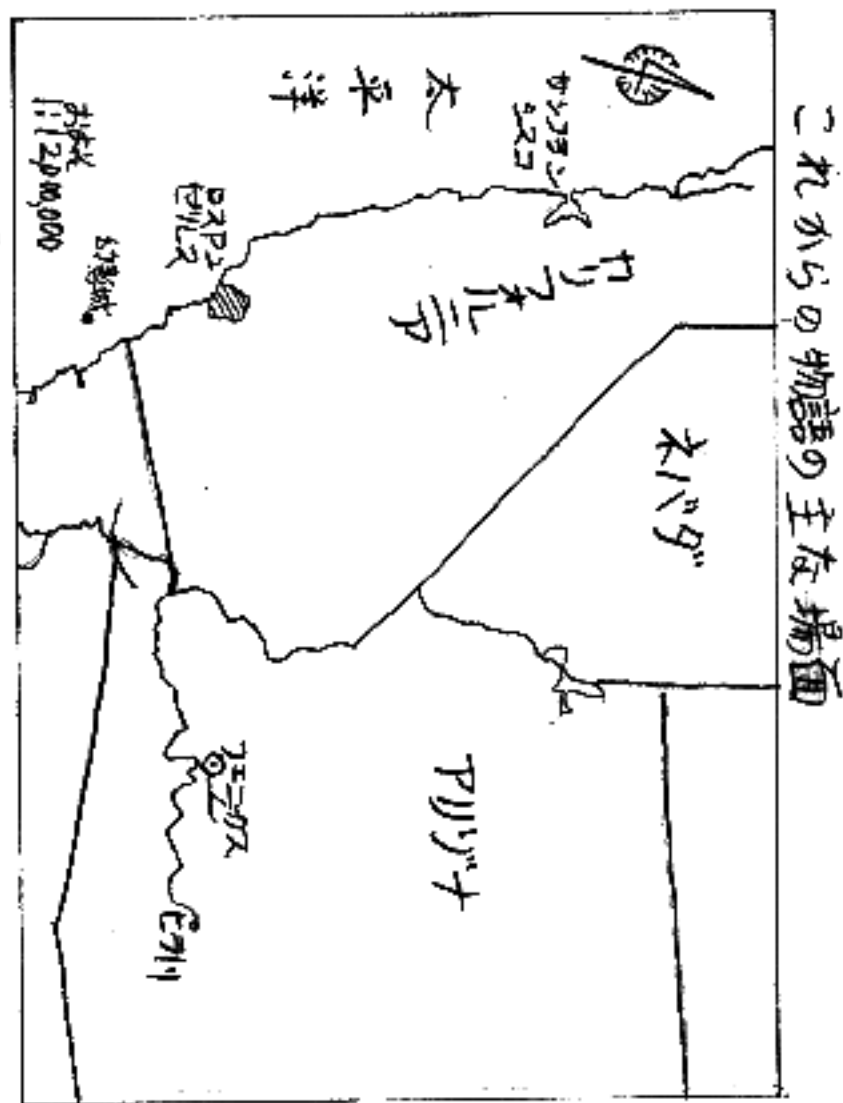


DEWECK & CARPENTHIA



伏見友孝



目次

第一部 脱走する怪盗

牢にはだれが
次はこれだー
5P 2P 2P

第二部

怪盗ジキークリッス
8P

ミチャムル一家

8P

怪盗の出現!!!

11P

第三部 怪盗の大からくり

18P

奇怪な城

ジキークの大トリック
生か死か

28P 21P 18P

登場人物

ヨーウ —— 牢獄の見取り番

ヨゼフ・スマイル —— タイヤの最高責任者

シマール・レイサー —— シマール家の主人

ジツケル —— うでまきのけい部

ジョゼフ —— ジツケルの部下

カーバンティヤ —— 名探偵

ジーク・レックス —— 怪盗



第一部 脱走する怪盗

牢にはだれが

この物語はアリゾナの都フェニックスのある
牢獄からはじまる。

「ああああ、ヨークは思いきりのびをした。
そして時計をみる。「さっもう一時か、みんなにメシを配ってこなければ」といってタバコをはり皿におさめた。そしてもう一度

大きなのびをすると「ロツロツと歩いていた。
わずかなメシをヨークは配っていた。

109号、110号、111号、112号……そして特別製の牢獄113号室の前まで来た。この中にかの有名なカレンシアアがつかまえたジャークリックスという大怪盗がいるのか」とつぶやいて、まどをあけた。「ああー！牢獄の中にはジャークははず、手紙がおいてあるだけだった。ヨークは急いでキーを

あけ他の因人にメシを配るのもわすれ
もうれつないきおいでおどりこんだ。

中はもぬけのからだだった。あらゆる所
をさがしたがざんねんながら形跡は
なに一つ残っていません。手紙と、それと
くしゃくしゃにまるめてある新聞紙が
ころがっているだけだった。ヨークはと
りあえず所長を呼ぶことにした。そ
してあちててもらうかきかけをいった。

次はこれだ！

ヨークは所長を連れて一目散にもどっ
て来た。所長は「この中だな」といって部
屋の中に入った。そしてあたりを
見まわして置きき手紙をみつけると
それを拾って読みはじめた。ヨークも
横からのぞいて読んだ。

その内容は次のような物だった。

拝啓 所長殿
 わがはらから来たのは残念だったか
 わがはらから来たのは残念だったか
 事をみんはあちをPISMA。
 あがはら 貴の貴族生ハダをオチタリ
 外にDNEIRU...
 貴方ニ
 Develle Jackson

これを見た所長は次にいちおうすみに
 まるめてある新聞も見て見た。

新聞は一面に大きくこう書いてあった。

アリゾナの古い宝石

シヤーマル家初ミラカ

まん中の大きい宝石たり
でも1億ドル

価値1億



「やつが次の獲物はこれだっ！」
所長のまゆがひきつった。

第二部 怪盗ジャック・レックス

シャーマル家

シャーマル家では、今日も客でいっぱいだった。

青銅の鏡、金のしょく台、銀の城のかざり物などの珍らしいものがらばりあった。

しかし一番人々の目をひきつけたのは、古くからアリゾナにつたある目も

くらむようなアリゾナの寶石だ。

「これが16億ドルか……」人々はそこにくぎづけになった。観客は息をのんだ。

女性、いや男性でも見たとたんすい込まれていくほどのすばらしい宝石だ！

16億ドル！これは人間が百年働らいても得られないような金だ。

とつぜん音楽がなりはじめた。閉場の時こくです。閉場の時こくです。」

客たちはしびしびと帰っていった。

せつかく16億ドルもするダイヤを見に来たのにもう終りかい。というように。

場内はシーンとなった。昼や、ふたん、人のいっぱいこの所ほど不思議とさみしいものだ。夜中の学校などはおそろしくて一歩もあつるけやしな。

と、向こうから一人の青年が大またで歩いて来た。この青年は、ヨセフ。

スマイル 16億のこのダイヤの最高責任者である。もとはジャーマル家のめし使ひのようなものだった。

怪盗の出現!!!

「ああ!!!」スマイルはとつぜんひめいをあげた。

すると、主人のジャーマル=レイサーけい部のジッパケルけい部などが走ってきた。

スマイルがはげしくおどろいて指さす指の先には血の染つたまっかな字で次のような文章が書かれていた。

予を捕らする!!

「1964年5月20日 土曜日 午後12時(0時)に
1116号室のドアを開けようとしたら!!

Smuck Verberna.



時こくは午後11時55分 手紙に書いてあった時この5分前になった。

部屋は スマイル レイサー ジャッケルとジャッケルの部下 ジョセフの4人になった。時計だけはいつもと変わらず コチコチとのんきにみえた。しかしそのコチコチの音一つでも その4人のむねを沈めくまざんぞろくおどろかした。思えた。

コチコチコチコチ……

ジャッケルはうで時計をみた。

「の時をすぎた！…さすがのジャークとらえどもこれだけみはりを固くしてればよってこられなかったとみえるな」といった。するととうぜんどこからともいえぬ、恐怖の固まりのような声がかきこえて来た。「みなさん、大怪盗ジャック・リックフスは、やくそくをわぶっあひなら

ぜ!!! さ、みなさん手を上げていたたまましましうかしみんなはその声のする方向に向いた。そこにはスマイル、いや大怪盗ジャック・リックフスが立っていた!!!
「バカニン、ガキニン」

ウインドがわれた。「実だんだぜ、へたなまねはよした方が身のためさ」といってジャークはウインドの中からアリゾナの宝石をとりだした。

「ラウム」と怪盗は思ったがアリヅナの宝石
だけあるな。「と」してまどをすかすかすあ
けた。ジャークはアリヅナの宝石をつかんで
下にとびおりた。「アッまで!!」下には
部下の車があってジャークはあつという
まにさきやうてしまった。暗くてメンバーも
読めなかつた。けいし庁の努力のから
もなく、アリヅナの宝石はジャークにぬすま
れてしまった。全世界をふるえあが

らせた大怪盗ジャーク・リックスに、

第三部 怪盗の大から入り

奇怪な城

朝になった。三人はねずに一夜をすごした。ジャッゲルけり部は、そばのソファにすわってゆううつそうな顔をしていた。ジョゼフはコツコツと何回もろう下の辺を歩きまわっていた。そしてシャーメル・レイサーは、ずいっと怪盗が宝石を持って出たままどの所を

ばくぜんとながめているだけだった。

とつぜん！今までゆううつな顔をしていたジャッゲルの目が光った！

「レイサーさん、あなたは怪盗の一番近くにいました。怪盗の車はどちの方面に

にげていききましたか？」

レイサーは、やっと正気づいて言った。
「そうでした。たしか左のほうに走って
いききましたよー」

「そうか、よしジョゼフ出発だー」

二人はヤッソウと車にのりこみ、アクセルをふんだ。しかし人気のない町のこと、

かくれがなどはいっこうに見つからない。

あたりは海べになった。

「あれは何だよ」「海べの横のぜいぶきのくずれた所に、奇怪な城が立っているではないか。」

ジャークの大トロッグ

二人はただ首をかしげるだけだった。

ちようぞそこをりようしが通りかかったのので聞いてみた。

「あ、あれ、あれは前のグロリアホテルで、
のでできたんだけど六年前、集団身な
げがあつてからだれも近よらないんすよ、
みんな「幻影城」っていってますけど、
だんなさん方、あすこへいくんだきゃあ

よしたがらぬすな」といってひきあげていった。
「ラウム」といって二人は顔を見合わせた。
そして車を「幻影城」とばした。

車は「幻影城」についた。苦しもがくように
波が「幻影城」の古らしきガにあたる。

「入るぞみよう。」

ととつぜん、シヤッケルは木の根につまづいた。
「ててて」起き上りかけたシヤッケルは、ある

事に気づいた。「この根のまわりの土は、また
新しい！」ということは下になにかあるな」と
というわけで二人が力を合わせひっぱると
根はどうもなく取れ、入り口が現われ
た。二人は静かに入っていた。
地下道だった。しばらく進むと戸口
があった。

そとあけると中はくらい。部屋の
ようだ。外では波の音がさわいでいた。

二人はそっと中に入っていた。

とつぜん！ 明りがパツとつき、一人の男が入って来た。「おあ、ごくるう、ジャッケルくん、来ると思って待っていたんだ。他ならぬジャークであった。」「君はずっと僕をつねらうねえ、これだけ言ってもわからぬまいようだね、いらいかい？ ああ、ジャーマル一家の宝石、代々つたある、なんていうのはみなウソッパチなんだよ、ほら、革命が

と前にあつたろう。その時、ラッセルという大金持ちがギロチンにかけられたね、ところがい族もみなギロチンにかけられたので、その金をひきとる人がいなくなった。そこで、レイサーはその金をぶんどってしまったのだよ。

三ヶ月前のロッキーから取った三十万ドルだって、ロッキーが税む所をこまかしてためた金だし、一年前の十三枚の絵だって、本当は、僕が持っていたものをぬすんだのだー、それでも

僕をねらうかい？」

「それにしても君のものではないぞー」

「よろしいー」ジャックはだままでボタンをおした。ーガガゴウルルルーッー

城がゆれた。ジャバーツという水しぶき

「いやあいくら人がこないといえこれを作るのには苦じしましたね、なにしろ城

自体が潜水艦ですからね」

「潜水艦艦？二人はどびよるほどおど

ろいた。「そうです。中から固め、底を

ほって機械を取り付けました」

「オ、オしたちをどこへつれていく気だ」

「フッフ」ジャックはいった。「僕はナイフでさした

り、鉄ぼうでこうったりして血を見るのは

きらいな方なんですすけれどあなた方は

はちょっとしつこい！それでゆくりと

左衛門にでもなってもらおうと思っ……

…なんていうのはうそですすけれどまあ

「ゆっくりしていらっしやうと下さる」

そういってジュークは、すばやくドアから出た。「まてっー」ジッターがドアをあけようとしたがあかなかつた。ー「ジュエルボールーだいたへんだ。」とジッター「あいつ本体と切りはなしたぞー」

生か死か

二人の乗った「幻影城」の一片は、海の中を上っているようだがなかなか上らなかつた。

ジッターはおそろおそろおそろとジッターの顔をのぞきこむようにして言った。

「もし上へ上るまで二の中の空気がなくなつたら……」

二人の顔が青ざめた。



「幻影城」の一片は、ゆっくりせん回しながらも少しづつ上つてらつた。

ところが二人は息苦しくなつて来た。

「うううう……苦しい！」

「せめてあと海面まで、どれ位かわかれ
ばいいのだが……」

「ううーん」「ジヨセツはたおれてしまった。」

「だいじょうぶか、しつかりしろ！」

間一髪!!! 一片は海面にふ上した。

ジヨゲルは、こぶしでまどきやぶりジヨセ
ツをだきかかえ、空気をすわしてやった。

「あ、ふ。」ジヨセツは二分後やっと正気づいた。
それから二人は、まどから体をのりだして
まわりを見てみた。

結果は絶望的であった。まわりは海、
海、海あるだけ。一つの島も見あたら
ない。

二人は、はたと困り、すわりこんでしまった。

(注)続きは 第二巻です。

解説「アリソナの宝石」

この作品は1970年6月12日から
考えはじめたものです。
なかなか次のアイデアがうめあらず
3ヶ月もかかりました。
加藤 信二さんにおまかせす

伏見友孝

(32)

DEWECK & CARPENTIERA

- シリーズ¹
- 2. アリソナの宝石
- 3. 未定
- 未定

各32P

1970年 9月17日 第1冊目発刊

HIMADA社